岩沼市婦人防火クラブ連絡協議会　ヒアリング記録

日　時　　2011年9月10日（土）13:00～

場　所　　岩沼市消防本部　会議室

参加者　　吉田 八重子 さん　（前岩沼市婦防会長･前宮城県婦防会長）
　　櫻井 よしみ さん　（現岩沼市婦防会長、東部地区）
　　金澤 典子 さん　　（市副会長、東部）
　　郷内 妙子 さん　　（市副会長、西部）
　　咲間 政子 さん　　（支部長、中央）

　　岩沼市消防本部　太田 充　消防司令長

１．背景・概要

岩沼市は、仙台市から南に約１８キロに位置しており、東西約１３ｋｍ、南北１０ｋｍと、西部は山岳地域にかかり、東部は太平洋までなだらかに広がった平野となっています。南部の市界には、阿武隈川が流れ、仙台湾に流入している。市のウェブサイトによると、震災前の人口は約4万4千人 ・ 1万6千世帯（平成 22年 12 月末）で、人口は過去数十年間増え続けている。

市北部の太平洋側には「臨空工業地帯」が発展して、大小の企業が集積する一方、沿岸部や西部の山側で農林業も行われており、田んぼや畑はもちろん、果樹農家もある。

また同じ市北部の太平洋側には仙台空港の敷地があって、隣市の名取市と両方にまたがっているため、空港ビルは以前より津波の際の周辺地域の避難所に指定されており、実際に東日本大震災の際にも、岩沼市と名取市の周辺の住民が空港ビルに避難して一命を取り留めている。

東日本大震災による死者は182人、行方不明者1人、重傷7人、軽傷286人で、家屋の被害は全壊723棟、半壊1,582棟、一部損壊2,631棟で、床上・床下浸水はまだ調査中である（9月30日現在）。被害が特に大きかったのは、沿岸の東部地区と玉浦地区である。消防の方によると、津波による浸水で現場に近づくことができず、ゴムボートも保有しているが、ガレキがあちこちにあり、もしも追突すると穴があいてしまうため安易に行動できないというジレンマの中、必死に救助活動が行われたという。

現在市内３か所に着工戸数400戸弱の仮設住宅が建設されているほか､民間借り上げ住宅や公営住宅で被災者の仮住まいに対応している。

婦人防火クラブは、東部・西部・中央地区から成っているが、前年のチリ地震による津波のあと、東部地区が津波の被害等に遭った場合は、西部地区が炊き出し等の支援を行う、といった、相互応援体制について話し合っていたため、通信手段が断たれた中においても消防のバックアップのもと、地震当日から地域連携で婦人防火クラブとして炊き出しを継続的に行った。

２．詳細

①各地区の状況

■東部地区（桜井よしみ）

東部地区は全体に津波の被害を大きく受けたが、地区内の５つの防火クラブが被災した。

私は当日、昼過ぎに車で家を出て用事を足し、農協で打ち合わせてから目の前のガソリンスタンドで給油した直後に地震に遭った。激しいゆれの恐怖の中でハンドルを握り締めながら自分に対して「冷静になれ、クラブ員として何をすべきか考えろ」と、こころを落ち着かせようとした。ただ、津波がくることはあまりイメージしていなかったので、ラジオで津波警報が発せられても実感がなかったが、ゆれが収まるとすぐにまずは自宅に駆けつけた。しかし、夫と娘はすでに避難したのかいなかったため、非常用持ち出し袋などを持ち出そうとしたが、家のなかがごちゃごちゃで取り出せる状態ではなかった。クラブ員として最低限の備蓄をと思い、我が家でも簡易トイレなども含めて備蓄していたが､そういったものがみな取り出せなかった。

この地域の指定避難所となっている仙台空港へ行けば家族に会えると思い、空港へ向かったが、途中歩いている人を車に乗せながら急いで空港の建物に入った。自宅に戻る途中の橋のひとつは亀裂が入って渡れず､もうひとつの橋を渡った｡これは近年新しくしたばかりのもので、いま思えば、もしもこちらの橋も老朽化で通行できなかったら、自分も津波に巻き込まれていたかもしれない。

仙台空港に着くと､全員が避難できたということで後のマスコミでも大きく取り上げられた、近くの老人ホームの入所者と職員が避難してきたところとちょうど遭遇した。

空港ビルの２階で、町内会長をはじめとした地域の人たちと一緒にいたが、3時56分に空港に津波が入り、津波が非常に大きいとわかって慌てて全員で3階に移動した。津波は家から車からたくさんのものを巻きこんで流れてきており、車に乗ったまま流される人もいた。結局その後6日間、空港の中で過ごすこととなった。

地域には班があるので､名簿はなかったが班ごとに手分けして避難して来ている世帯を確認。自分の地区は、107世帯中48世帯が避難所に来ていないことが確認され、後日、そのうち22世帯で43数名もの犠牲者があったことがわかった。亡くなった方のうち12名クラブ員である。

空港ビル全体には1,300名ほど避難してきたが､寒いので大きなビニル袋に穴を開けて防寒としてかぶって寒さをしのいだり、売店に売られていたお菓子やかまぼこなどが僅かづつでも配られたため、それで食べ物をしのいだ。数日後に毛布が入りだしたが、最初は数が足りなかったため、子どもや高齢者に優先して配った。

こうして空港での避難生活を送っている間も、婦人防火クラブでは副会長さんたちはじめ、みんなで協力して被災者のための支援活動を行ってくれているに違いないと確信していた。

なお、わたしは自宅が津波で流されたため、現在仮設住宅に入って生活している。

■矢野目地区（金澤 典子）

この日はちょうど中学の卒業式で、自分も民生委員として式に出席し、自宅に戻って昼食を食べてほっとしたところに揺れがきた。いったいどうやって外に出たのかもわからないが、庭の真ん中で家族と肩を抱きあって揺れをこらえていたが、周囲の家屋や納屋が崩れたりして、もうだめかと思うくらいに恐ろしかった。自宅の石油タンクも倒れてみな中身が流れ出てしまった。その後、津波が来るから避難してくれ！と町会の人たちが知らせて回ってきてくれたので避難所へ車で向かうが、県道が渋滞だったため、夫が車外に出て渋滞を誘導してくれ、なん

とか先へ進んだ。
　集会所は200人くらいの人が避難して来ていて、ペットもいたが、集会所に到着してすぐに、手の空いているクラブ員に協力を呼びかけて、町内で用意された米や近隣農家の井戸水、釜、ＬＰガスを使って、当日の夜から炊き出しを行った。農家が多いため発電機を持っているお宅も多く、照明もあった。水は大切に使った。お店をやっているひとなどが、「食材が悪くなってしまっては意味がないから」といろいろと持ち寄ってくれた。
　簡易トイレが物資として配布されたが、ダンボールにビニル袋をかけて使うもので、自分たちもつらかったが、高齢者などが利用する際に苦労していた。
　3月11～15日までその集会所にいたが、その後、市の手配したバスで二次避難所となった市民体育館へ移動し、その後4月まで避難所で炊き出しや物資の配布などを行った。
　矢野目地区は、海に近いエリアに工業団地が多くあり、そこで津波の威力が弱まったため、住宅への被害は少なく、また生協や食品会社などの物流基地もあったことから、早くに物資が入ってきた状況でもあった。ただし、各企業の被害は大きかった。

■西部地区（咲間 政子）

　自分の家はコンビニエンスストアを経営していたので、地震がおきてすぐお客さんに「危ないので外に出てください！」と呼びかけ、みなで外に出たとたんに強い揺れが起こり、ガラス瓶の商品が床に落ちてお酒の匂いがただようなど、たいへんな状況となった。
　しかし、ちょうど地震直前の2時過ぎに食材など新しく商品が入ったところで、それらは大丈夫だったこと、商品を有効にしなければいけないと、すぐにお店の外に場をこしらえ、電卓を持ってお弁当やおにぎり、電池など、端数を切り捨てて安めに提供しながら近所の方たちに避難生活に必要なものをお分けした。
　店をある程度片付けて従業員の人にあとを任せられた3日目から、婦人防火クラブによるハナトピアでの炊き出し支援に加わった。
　町内は、町内会長さんたちが手分けして300世帯の安否を確認し、特に高齢者の一人暮らし世帯は重点的に見て回ってくれていた。元農家で井戸水をいまも確保できる世帯もあり、全体で協力しあった。

②全般（婦防全体としての活動や個別課題など）

■岩沼市婦人防火クラブとしての取り組み（西部地区 郷内 たえこ）

　地震の時は、翌日に市の施設「ハナトピア」で実施される予定の春祭りで婦人防火クラブとしても出店するため、材料を調達しようと東部地区へでかけていた。揺れが収まったあとすぐ家へ戻ったが、テレビで名取市の閖上地区の被害の様子を見て、これは大変なことが起こったと、行動する必要性がすぐに理解された。
　というのも、前年のチリ地震のあとの婦人防火クラブの会合で、もしも何かあって太平洋に接する市の東部地域一帯が津波で被害を受けるようなことがあれば、山側の西部地域で炊き出し支援を行いましょう、と申し合わせていたためである。
　そうした事情から、消防署からもわたしのところへ「炊き出しをしてほしい」との連絡が入り、すぐに炊き出し拠点をどこにするか検討し決定した。最初は、中央地区でとの提案もあったが悩んだ末、翌日の祭りの準備で道具が調っており、被害の少ない西部地域のクラブ員が来やすい「ハナトピア」が適地だと判断して、消防と合意し、消防の方に各地区の会長にその内

容で連絡をしていただいた。市内25支部のうち、西部8地区、中央4地区の役員に知らせてもらって協力をあおいだ。
　そこですぐに自分も「ハナトピア」に入り、釜やなべを集め、市が届けてくれた生協のお米を使って炊き出しを開始。そのほかにもクラブ員はじめいろいろな人が食材を持ち寄ってくれた。初日は2千個のおにぎりを作って、市役所がそれを配布。片づけをして自宅に戻ったのは夜中の2時だった。
　水は貴重なため、米は洗わず、計量もできないので、手計りで炊いたが、中には失敗した釜やこげがひどくなってしまったものもあり、おかゆにしてハナトピアの避難者の方の食事として食べて協力いただいたりした。また炊き出しのためフル回転だったので、壊れてしまった炊飯器もあった。炊き出しで一番苦労したのは水。水道の本管がだめになって市内は断水したが、浄水場自体は大丈夫だったので、ハナトピアへ水をピストン輸送してもらった。ガソリン不足も大変だった。
　ハナトピアでの炊き出しは3月24日まで続き、もっとも多い時で1万3千個のおにぎりを作った。2日目から自衛隊が大きな釜で大量のご飯を炊いてくれたので、たくさんのおにぎりをつくることができるようになった。日にちがたつにつれ、5升分のご飯を8分で握り終えるまでにスピードアップした。
　もちろんただ流れ作業を行うのでなく、「心をこめて握ろう！」が合言葉だった。
　衛生面にはたいへん気を使い、市が支給してくれたビニルの手袋をして手袋が取れないように輪ゴムで手首をとめ、消毒用アルコールで手も丹念に除菌するなどした。水は、浄水場からタンクで汲んできてもらったものを使っていたので、大変貴重だった。
　2週間でのべ729人のクラブ員と200人以上の市民ボランティアが手伝ってくれたので、延べ1,000人ほどがこの活動を担ったことになる。
　ただし、市内全域の各地域でも炊き出しが行われていたため、地元を優先していただいて、ハナトピアには可能なように数名ずつ出してもらうようにし、市民ボランティアの方にも協力していただいて炊き出しを行った。中には、母親と共に参加してくれた高校生・中学生や、会社が休みになってしまっているのでと、お手伝いに入ってくれた男性もいた。
　婦防クラブ員の多くが、家のことをある程度後回しにしながら、こうした支援活動に協力してくれわけだが、夫や舅・姑がいやな顔をするようなことは無かったようだ。それは普段から真剣に活動に参加していること、こうした助け合い活動の必要性への理解がある地域だからだと思う。

■避難に関する現実

　避難に関連して、以下のような現状や課題について複数の方から話題が提供された。
＊この地域一帯は、耐震の備えは相当していたので、つぶれた家というのはそうなかったが、後片付けをしていた人や、幼稚園から帰ってくる子どもを待っていた祖父母が犠牲になった例がけっこうあった。
＊避難所にいくと環境も悪くトイレなども心配だからいくのがいやだといって逃げなかった人もいたようだ。
＊現代の家は気密性が高いので、広報車で避難を呼びかけても、家の中まで聞こえにくいということもあった。消防団や協力隊がよびかけても真に受けずに避難しない人もいたため犠牲になったひともいる。避難勧告は強制できるものではないので難しい。
＊古いストーブなどを使って煮炊きを行うことができた。

■被災者の心理状況と災害時要援護者との向き合い方（櫻井 よしみ）

空港ビルでの被災者の様子だが、被災者間の協力はかなりスムーズに進めることができた。

中には夫が犠牲になった若い奥さんが、子どもと義理の親を抱えて避難してきているケースもあったが、物資を配給するとなると、子どもを祖父母らに預けて一緒にさっと作業に参加してくれていた。そういう若いお母さんが、子どもたちの見えない物陰で泣いているのをみると、本当に胸が締め付けられたし、また子どもたちの前で涙を見せまいとする様子に親としての強さも感じた。

ただ、中にはたとえば、パンを配っていると、一人一個であっても余計にもうひとつ持っていく人もいる。そういう人を見かけると、「こういうときなので一人一個ということで協力してください～」と角が立たないように呼びかけることもした。それで、きちんと戻してくれる人もいた。こういうときは、全体の空気が悪くならないように、ものの言い方も工夫ひとつでだいぶ効果があると思った。

また、夜は明かりも無く真っ暗になるが、そういう中で高齢の女性で認知症のある方が、騒いだり他人のものをいじったりするようなことが起こった。その後、周囲の人がそのことで文句をいろいろと言うようになり、お孫さんである若いお嬢さんが、「うちのおばあちゃんのことを言われているんですね」と、つらそうにおろおろとしてしまっていた。その女性のお母さん、おばあさんからするとお嫁さんが、いつもそのおばあさんの面倒をみていたのだが、そのおかあさんが市外に用事ででていたため、同じ避難所に避難できていなかったことから、うまく対処できない状態だったようだ。

そこで、わたしはそのお嬢さんに「そんな風に思わなくていいのよ」、と声をかけてはげましていたところ、他の方が、「おばあさんは周りが真っ暗で恐怖心を持ってしまって混乱しているのではないか？」と思いつき、懐中電灯の明かりをつけてあげるととたんに静かに過ごせるようになり、お孫さんもほっとしたということがあった。

このお嬢さんについては地域で見かけることはあっても、今まではどこのお宅のお嬢さんかな？という感じだったが、その後同じ仮設に移って行きかうことがあると、気軽に声を掛け合える関係となった。

こういう危機的状態だと人間性というものが出てしまうようで、だいたいが協力的ではあるが、一部非協力的な人、ひとりよがりな人もでてくる。そうしたときに、どう全体として環境をよくするのかや、周囲の気遣いが大切だとつくづく感じた。

■仮設住宅

仮設住宅は市内に3か所384世帯分建設され、約1,000人が入居しており、もともと住んでいた同じ地区内の人同士で入居できるよう市で配慮しているという。櫻井会長によると、一緒に仮設住宅に入っている町会会長さんから、「仮設住宅での防火啓発にも、婦人防火クラブは必要だぞ！」、と声をかけて下さることもあるといい、今後は仮設住宅という地域の中でも、婦人防火クラブの活動の在り方を考えていきたいとのことであった。

■復興課題

○現在、集団移転について地域から要望が出されていて、住民の80％程度が移転を希望しているようだが、それぞれに事情が違う。地震保険に入っていなかった人もいる。貯蓄がそうない人も多く、住宅再建の支援金等として300万いただけたとしても、住宅再建となると難しい。中には、家も建てられないし、天国に避難したい、などと言う高齢者もいて、そういう言葉を聞

くとつらい、という。

○義援金の配分はまだ途中で、とりあえず100万円は支給された。

○農業の被害は非常に厳しい。東部道路より東が津波被害をうけており、毎日100人以上で田んぼなどに入りこんだ瓦礫の撤去などを行ってきたが、排水ポンプが機能しなくなったり、予算が厳しくなってきたりという状況の中で、塩害処理も思うように進まず、特に専業農家は厳しい状況にあるとのことであった。

３．今後に向けてとメッセージ

■分析

○婦人防火クラブの会長会議は基本的に年４回行ってきたが、全体の空気として、何かあると役員でこまめに集まって話し合うという形で継続してきたというが、この関係性が、今回の地域連携につながったといえよう。

○昨年のチリ地震の時に、もしも今後津波警報が出たり被害にあったら、西部地区が炊き出しを行うようにしよう、という話し合いができていたのだが、実は平成9年に西部地区が水害をうけた経験もあったそうで、どの地区もお互い様という思いもあって、東西が相互に助け合うようにしよう、という機運をつくることができたといえよう。そうした合意があったので、すぐに連携ができたわけだが、日ごろからの話し合いが重要だと感じたと、大田充消防司令長からもコメントをいただいた。

■組織の今後

○櫻井会長によると、婦人防火クラブの共済についても連絡を取る必要があったため、東部地区内のさらに各地区の会長さんたちを訪ねて話をし、組織だけはなくならないようにしてほしい、と頼んで周っているという。いずれは地域ごと集団移転、ということもあろうかと思うので先は見通しにくいが、組織を０からたち上げるとなると難しいだろうと考え、どのような形でも継続していく方向で話し合っているという。

○また、法被やバッチを失くしているひともいると思うので、日本防火協会に協力をお願いしたいとのことであった。

○クラブ員のみならず､地域からもクラブを無くしてはいけないね､おにぎりおいしかったよ、と声をかけていただいたりした。全体としての状況を踏まえて、出来る範囲で継続をお願いするような形をとっていきたいと、気遣いと熱い思いを語っていただいた。

○なお、岩沼市婦人防火クラブは創立（昭和56年）から30年たつため、現在、30周年の防火研修会を準備中で、11月20日には式典を行う予定だが、1,000人は集めたいと考えているという。式典では、安心音頭という啓発の踊りを披露する予定であるが、これは以前、八戸市との交流で知った曲で、八戸市の消防署が作ったもの。ＣＤと踊りの説明を送ってもらって練習し、震

災前に市民の目に触れやすい場で踊りを披露したところ、会場で防火クラブがない地域の町内会長さんから声をかけられ、立ち上げを検討したい、と言われたこともあった。ＰＲも大切であると、柔軟な発想によるクラブの盛り上げと市民への共感を得るための活動を心がけている様子がよく理解された。

■メッセージ

○この震災では全国各地のみなさまからご支援をいただき、本当に感謝しています。自衛隊も懸命に救援活動をしてくれて、またたとえばヤマト運輸さんも、ガソリンが乏しい状況の中で主体的に配送などに協力してくれるなど、本当にありがたかった。

○いままで便利な暮らしに慣れていたが、暮らしの見直しが災害対応力を高めることにつながると思う。

○町内会で防災組織を立ち上げておくことはとても重要。町内でも炊き出しが行われており、それに参加した防火クラブ員も多くいる。地域の人で、何かしたくて役所へいったケースがあったが、個人ではなかなか活動への参画が難しかったようだ。婦人防火クラブとして組織があることが、地域としても個人としてもより意義のある活動を可能にしてくれる。

（以上）